

徳富蘇峰の大日本膨脹論とアメリカ

—明治20年代を中心に—

澤田次郎

はじめに

近代日本を代表するジャーナリスト、歴史家の徳富蘇峰（1863～1957）が論壇に不動の地位を築いたのは、周知のように明治20年代のことであった。明治19年（1886）、『将来之日本』を発表して文名を揚げた蘇峰は、翌20年に総合雑誌『国民之友』、23年に『国民新聞』、25年に『家庭雑誌』を創刊し、そのかわら『新日本之青年』『日本国防論』『吉田松陰』『大日本膨脹論』を著し、「国民叢書」のシリーズを次々と刊行するなど精力的かつ多彩な言論活動を行い、青年知識層から圧倒的な支持を受けた。¹ 当時の新聞雑誌は『国民之友』の評判を次のように伝えている。「議論の精深なる文辞の絢爛なる、早くも操觚の世界に於て別に赤幟を樹てたりとの評喧すしく、益々隆盛の勢あるとぞ」、「国民之友は相替はず痛快の文章多し」、そこに連載された文章は「政治の思想を抱く青年に取ては好き方針と云ふべし」。² また『新日本之青年』については「近頃一種愉快の教育論なり」、「旨意明晰、文章流暢敢て間然する所なき有用文字なり」といった具合で

-
- 1 蘇峰の経歴は主として、和田守編「年譜」植手通有篇『明治文学全集34 徳富蘇峰集』（筑摩書房、昭和49年）所収を参照した。同書は以下、『蘇峰集』と略記する。
 - 2 「国民之友の祝燕」『郵便報知新聞』明治20年5月5日、「雑記」『六合雑誌』81号、明治20年9月、368頁。史料の引用に際し旧字体は常用漢字、変体仮名は現代仮名に改め、適宜読点を付けた。以下同様。
 - 3 「新日本之青年」『郵便報知新聞』明治20年5月29日。これらは蘇峰と同一の政治、思想傾向をもつ新聞雑誌の場合であるが、その他の新聞になると、『国民之友』は「文字徒らに奔放にして論理却て緻密を欠くやの評あれども、今後号を重ねるに随ひ文の健なるに加ふに論の密なるに至らば、亦一の好雑誌たるべし」（「雑誌発兌」『時事新報』明治20年2月18日）といったように、幾分批判を含めつつ支持するケースがある。またライバル誌は蘇峰に対して、「口に高言を吐きながら己れはやその流行病に取付かれしよな」といった調子の非難を浴びせている（漣山人「徳富猪一郎君と美妙齋主人とソシテ省亭先生とに三言を呈す」『日本人』20号、明治22年1月、31頁）。いずれにしても、こうした毀誉褒貶の数々が当時の蘇峰の存在感を物語っている。

ある。このように蘇峰の言論は当初から支持者に恵まれてスタートした。³

-
- 4 蘇峰研究の動向については、杉原志啓「訳者解説」ビン・シン『評伝 徳富蘇峰——近代日本の光と影——』（岩波書店、1994年）所収を参照のこと。
- 5 既存研究は膨大な数にのぼるため、ここでは管見の及ぶ限りで、とくに本稿に関連する研究のみをあげておきたい。松本三之介「国民的使命観の歴史的変遷」『近代日本思想史講座8 世界のなかの日本』（筑摩書房、昭和36年）、和田守「徳富蘇峰の『平民主義』における西洋文明観とナショナリズム——明治20年代における在野ナショナリズムの一形態の分析——」『私学教育研究所紀要』14集、昭和43年2月、田畑忍「徳富蘇峰の生涯と政治思想」『キリスト教社会問題研究』12号、昭和43年3月、ジョン・D・ピアソン「『国民之友』に現われた民友社の社会・政治思想」『人文科学』2巻3号、1974年7月、のち同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』（雄山閣、昭和52年）に収録、John D. Pierson, “The Early Liberal Thought of Tokutomi Sohō: Some Problems of Western Social Theory in Meiji Japan,” *Monumenta Nipponica* XXIX, no. 2 (Summer 1974); 渡部昇一「真の戦闘者・気骨ある文化人」『正論』昭和49年11月号、のち渡部『腐敗の時代』（文藝春秋、昭和50年）に「真の戦闘者・徳富蘇峰」として収録、杉井六郎『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版局、1977年）のとくに第五章「蘇峰の中国観」、John D. Pierson, *Tokutomi Sohō, 1863-1957: A Journalist for Modern Japan* (Princeton University Press, 1980); 中村勝範「徳富蘇峰」利光三津夫、中村共著『消された英雄たち』（プレジデント社、1981年）所収、宮本盛太郎『知識人と西欧』（蒼林社出版、1983年第2版）の第2章「徳富蘇峰の『転向』とイギリス」、安藤英男『蘇峰 徳富猪一郎』（近藤出版社、昭和59年）、和田守『近代日本と徳富蘇峰』（御茶の水書房、1990年）、柴崎力栄「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について——海軍力と国際情報への着目——」『大阪工業大学紀要 人文社会篇』36巻1号、1991年10月、有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』（吉川弘文館、平成4年、第八章「大正末期における対外論」が幅広い視野から蘇峰の膨脹論に言及している）、ビン・シン『評伝 徳富蘇峰』のとくに第二章「蘇峰の膨脹主義理論」、額原善徳「日清戦争期日本の対外観」『歴史学研究』663号、1994年10月、西田毅「天皇制国家体制の確立と国家主義の抬頭——民友社と政教社グループの思想を中心に——」西田編『近代日本政治思想史』（ナカニシヤ出版、1998年）所収、宮本盛太郎「徳富蘇峰『将来之日本』」大塚健洋編『近代日本政治思想史入門——原典で学ぶ19の思想——』（ミネルヴァ書房、1999年）所収、米原謙「『膨脹』する『大日本』——日清戦争後の徳富蘇峰——」『阪大法学』50巻4号、平成12年11月、のち米原『近代日本のアイデンティティと政治』（ミネルヴァ書房、2002年）に加筆収録、梅津順一「『文明日本』と「市民的主体」——福沢諭吉・徳富蘇峰・内村鑑三」（聖学院大学出版会、2001年）、神谷昌史「文明・大勢・孤立——徳富蘇峰における『支那』認識——」『大東法政論集』10号、平成14年3月（神谷論文は新しい研究を多く参照しており、最近の研究動向を知る上でも参考になる）、Vinh Sinh, “Tokutomi Soho and Imperial Japan’s Destiny,” *Journal of Japanese Trade & Industry* vol. 21 no. 3 (May/June 2002); 米原謙『徳富蘇峰 日本ナショナリズムの軌跡』（中公新書、2003年）、李京錫「徳富蘇峰の垂細亜モンロー主義——大乘的使命と小乗的使命の関係——」『早稲田政治公法研究』73号、2003年8月、宇野田尚哉「成立期帝国日本の政治思想 民友社系知識人の場合を中心に」『比較文明』19、2003年12月など。さらに近年、出版された浩瀚な西田毅、和田守、山田博光、北野昭彦編『民友社とその時代——思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡——』（ミネルヴァ書房、2003年）は蘇峰に関する多くの論文を収録しており、この分野の研究を大きく進展させている。以上のうち米原氏の研究は本研究のテーマと重なる部分があるが、本稿ではまず蘇峰の言論の背景となった当時の国際情勢（とくにロシア、イギリス、アメリカの動向）を説明した上で、蘇峰の対応を明らかにするように努めた。欧米からの衝撃の有様を押さえておかなければ、それに対する日本人の反応を理解することは難しいからである。

蘇峰にとって明治20年代は、平民主義者として論壇の地位を確立した時期であると同時に、帝国主義の立場を徐々に鮮明にしていく時代として重要な意味をもっている。そのため、よく知られるように蘇峰に関する先行論考はこの時期に集中しており、数多くの研究が蓄積されてきた。⁴ それらをテーマに沿って分類すると、おおむね以下のように整理できる。第一に平民主義から帝国主義への変容をめぐる政治、外交思想、対外観およびナショナリズムの問題、第二に条約改正問題と対外硬運動における言論と政治活動、第三に立憲政体構想と議院内閣制論、第四に文学、小説家との関係ないしは比較、第五に漢学の教養、第六にアメリカ文学の受容、第七に道徳観、第八に教育思想などである。ただし以上は便宜上、区分したものにすぎず、杉井六郎氏をはじめとする代表的研究者はそうした枠にとらわれず、様々な観点から蘇峰の分析を進めてきた。さらに、蘇峰の指導下にあった民友社と『国民之友』および『国民新聞』を考察する優れた研究、資料集が発表されている。⁵

本稿ではこうした先学の知見を参照しつつ、これまで正面から取り上げられることの少なかった明治20年代の蘇峰のアメリカ観を考察したい。この点に関連して、三輪公忠氏が蘇峰の『大日本膨脹論』を取り上げている。それによると、『大日本膨脹論』にはハワイ王国を倒したアメリカ系白人の砂糖黍農場主による共和主義革命から受けた強烈な衝撃が色濃く反映されている。さらに同書は、成長（膨脹）し続ける国家のみが生き残ることができるという生物進化論的な基本認識に立ち、日本とアメリカの衝突、抗争が避け難いものであることを予見していたとする。⁶ また亀井俊介氏、佐渡谷重信氏は蘇峰によるヘンリー・W・ロングフェロー、ラルフ・W・エマソン受容の問題を扱っている。両氏ともに、蘇峰がロングフェローの「村の鍛冶屋」などの詩から道徳的影響を受けつつ、平民社会の勤勉自活の気風を肯定的に取り入れた点に着目する。また、蘇峰がエマソンに触発されて「インスピレーション」（明治21年5月）や「新日本の詩人」（21年8月）を書いたことを説明する。とくに佐渡谷氏は、蘇峰がエマソンに人間の独立（個性の完成）、神学論、性善説、ナポレオンの英雄観、向上的精神、奴隷制廃止など多岐にわたる魅力を見出し、国木田独歩、北村透谷、徳富蘆花らにエマソンを勧めて日本におけるエマソン思想の伝播に貢献したことを指摘する。⁷ こ

6 三輪公忠「徳富蘇峰の予言」『諸君！』平成2年1月号、243頁、外務省外交史料館、日本外交史辞典編纂委員会『新版 日本外交史辞典』（山川出版社、1992年）の徳富蘇峰の項。また三輪『隠されたバリーの「白旗」 日米関係のイメージ論的・精神的的研究』（Sophia University Press 上智大学、1999年）177頁もハワイ革命の蘇峰への影響に言及している。しかしながら筆者が『大日本膨脹論』を読んだ限りでは、そうした影響を読み取ることのできる個所、あるいは日米抗争を予見している記述は見当たらなかった。

のように両氏は文学の観点から蘇峰に論及しているが、本稿では三輪氏と同様に外交思想上の視角から蘇峰の対米認識、とくにその大日本膨脹論とアメリカとの関係を検討してみたい。加えて、これまで知られていない同論におけるエマソンの影響についても論及する。

なお蘇峰のアメリカ観について、筆者はこれまで日露戦争から日米戦争に至る時期を検証し、さらに時代をさかのぼって少年時代、大江義塾時代、アメリカ旅行期を考察した。⁸ 今回の論考はそうした一連の研究の中に位置づけられることも付言しておきたい。

1 西洋列強からの重圧感と屈辱感

明治10年代の蘇峰は中央アジアをめぐるロシアとイギリスの対立、および両国の東北アジアにおける抗争を警戒したが、⁹ 20年代はどうであったか。蘇峰とアメリカについて述べる前に、当時の国際情勢を見ておきたい。

第一に着目したいのは、ロシアの動向である。中央アジアに進出するロシアは明治18年（1885）のペンデュー事件から生じた英露危機が回避された後、明治19年から24年にかけて、中央アジアから東アジアへと関心の比重を移していった。¹⁰ ロシア代理公使兼総領事のカール・I・ウェーバーは朝鮮宮廷、政府に接近し、ロシア勢力の浸透を進め、明治21年の陸路通商条約によって慶興を開き、翌22年には海南と濟州島の間にある鹿島を東洋艦隊の寄留地及び貯炭場にすることに

7 亀井俊介『メリケンからアメリカへ 日米文化交渉史覚書』（東京大学出版会、1979年）、亀井『新版 ナショナリズムの文学——明治精神の探求——』（講談社学術文庫、昭和63年）、佐渡谷重信『アメリカ精神と近代日本』（弘文堂、昭和49年）、佐渡谷『アメリカ精神と日本文明』（講談社学術文庫、1990年）。浩瀚な佐渡谷『日本近代文学の成立——アメリカ文学受容の比較文学的研究——』上、下（明治書院、昭和52年）はロングフェロー、エマソンの蘇峰、『国民之友』に与えた影響を詳細に検証している。

8 拙著『近代日本人のアメリカ観——日露戦争以後を中心に』（慶應義塾大学出版会、1999年）の前編「近代日本人の典型としての徳富蘇峰とアメリカ」に収録された論文六点と、「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー——自由民権運動後半期を中心に——」『法学研究』74巻7号、平成13年6月、「徳富蘇峰とアメリカ人の交流——書簡を手がかりに——」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第3・4合併号、2002年11月、「少年期の徳富蘇峰とアメリカ——1863～1880年——」『同志社アメリカ研究』39号、2003年3月、「徳富蘇峰のアメリカ旅行」『法学研究』77巻6号、平成16年6月、「徳富蘇峰と四人のアメリカ人——その親交と蘇峰に与えた影響——」『尚美学園大学総合政策論集』1号、2004年12月を参照されたい。

9 拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー」63-72頁。

10 Andrew Malozemoff, *Russian Far Eastern Policy 1881-1904: With Special Emphasis on the Causes of the Russo-Japanese War* (New York: Octagon Books, 1977), 36-9.

は失敗したが、元山に貯炭所を開設する許可を得た。¹¹ 加えて24年にはシベリア鉄道の建設が12年後の完成を目指して始まった。シベリア鉄道計画は欧州ーウラジオストックー上海を18～20日間でつなごうというもので、それまでの欧州ースエズー上海航路を25日短縮し、5年前に開通したばかりの欧州ーカナダー上海ルートを15日短縮するという画期的な構想であり、海上航路を支配するイギリスへの挑戦を意味した。¹² この鉄道からロシアは貿易だけでなく軍事戦略上のメリットを得ることができ、それがロシアの南下を警戒する日本政府と軍部、とくに山県有朋に危機感を抱かせたことは知られている。¹³ さらに明治28年の日清戦争終了後、三国干渉によって日本の遼東半島還付に成功したロシアは1860年以来の積極的な極東政策を再スタートし、フランスと共同で対清借款を成立させ、露清銀行を設立し、翌29年には満洲北部を横断する東清鉄道敷設権を獲得して、二年後に着工することになる。また日清戦争直後、親露政策をとる閔妃が三浦梧楼公使ら日本人と大院君一派に殺害され、親日派が朝鮮の政権を握ると、ウェーバーは親露派とともに国王・李太王を王宮から奪取してロシア公使館に移し、一年後に日露妥協がなされるまで親露内閣をロシア公使館内に置くとともに、慶源、鏡城の鉱山採掘権、茂山、鴨緑江右岸、鬱陵島の森林伐採権を獲得した。また日清戦争中、日本は京釜鉄道の仮敷設権を朝鮮から得ていたが、ロシアはその正式許可を日本に与えないよう朝鮮に圧力を加えた。¹⁴

このように明治20年代は、ロシアが中央アジアから東北アジアへと膨脹の矛先を転じ、朝鮮、満洲への進出を次第に加速化していく時期にあたる。そうした中で蘇峰はどのような考えを抱いたか。シベリア鉄道起工の三年前、明治21年の時点で蘇峰は次のように述べている。「露国が一たびシベリヤ鉄道のウラジオストックに通するの日に於ては、東洋の兵略上に於て、一大変化を来す事は、素より予じめ覚悟せざる可からず」、もしこの鉄道が落成すれば、サンクトペテルブルクからウラジオストックまで遅くとも二週間、早ければ一週間で到達できる。そうすれば露国が一夜のうちに日本国の近傍に移転したようなもので、わが邦は「敵国」、19世紀の「一大野蛮力」を眼の前に見ることになる。「吾人は今日よりして断言す、我邦に於て恐る可きは、朝鮮に非らず、支那に非らず、即ち露国、シベ

11 主として「新東亜」編輯室編、鈴木博訳『朝鮮近現代史年表』（三一書房、1980年）を参照した。

12 Dietrich Geyer, *Russian Imperialism: The Interaction of Domestic and Foreign Policy 1860-1914* (Leamington Spa: Berg Publishers Ltd., 1987), 188-7.

13 井上勇一『鉄道ゲージが変えた現代史 列車は国家権力を乗せて走る』（中公新書、1990年）51-54頁、井上「不平等条約から同盟へ——1867-1902年の日英関係」木畑洋一他編『日英交流史 1600-2000 1 政治外交 I』（東京大学出版会、2000年）所収、169頁。

14 主に『朝鮮近現代史年表』を参照。

リヤ鉄道の落成の後ちなる露国に在る事を」。¹⁵ このように蘇峰は早い時期からロシアの動きとシベリア鉄道に注目したが、そうした蘇峰の警戒心を反映して『国民之友』はロシア人がきわめて「膨張的の性質」を有することを指摘し、将来アジアの北半分はロシアに、南半分はイギリスに占領されるだろうというアルミニウス・ヴァンベリーの意見を引いて読者の覚醒を促していたし、『国民新聞』はロシア・朝鮮間の陸路通商条約やウェーバーの活動に言及して、このままでは朝鮮はロシアの属国、駐屯地になり、わが国の西境にロシアが迫ることになると警告し、シベリア鉄道によるロシアのウラジオストック軍港強化にも注目した。¹⁶ さらに明治27年、東学党の乱により朝鮮が混乱に陥ると蘇峰は、朝鮮を放置しておけば列国〔ロシア、イギリス〕が蹂躪し、そこから天下の争いが始まると警戒し、日清戦争後、ロシアが朝鮮に保護政治を布くと、このままロシアが居座れば我々は高枕安臥できない、朝鮮の独立は「国民的生死問題」とであると訴えた。¹⁷ 以上のように、明治20年代の蘇峰は東北アジアにおけるロシアの膨脹、南下に重圧を感じ続けていた。

しかしながら、蘇峰に心理的圧力をもたらしたのはロシアだけではない。第二に、イギリスの動向を見てみたい。明治20年代のイギリスは、アジアよりも太平洋とアフリカで目立った膨脹を続けていた。明治21年（1888）から22年にかけてイギリスは、太平洋の小島や無人島をケーブルの中継点にするため次々と併合した。1890年代半ばまでにイギリス帝国が張り巡らせた膨大な海底ケーブル網は海底電線31万5,044キロ、空中線と地上電線122万6,818キロに及び、それは情報収集の見地から船舶や鉄道よりも重要であり、アジアでの経済利益を拡張する上でも効果をあげた。その一方でイギリスはエジプトと南アフリカの両端からアフリカ征服を進めていった。明治22年、イギリス南アフリカ会社はローデシア確保の特許を受け、24年、イギリスは英独ヘリゴランド条約でウガンダ、ザンジバル、ペンバ島、ニアサランドなどの利権を得、さらに27年、ウガンダを保護国とし、

15 「日本の国防を論ず 第一」『国民之友』26号、明治21年7月20日、11-12頁。この論稿が蘇峰執筆であることは、和田「年譜」を参照。明治文献資料刊行会編の復刻版『国民之友』（明治文献、昭和41-42年）を使用した。以下同様。

16 「露西亜 第四 巨人の膨脹性」『国民之友』50号、明治22年5月11日、9頁、「中央亜細亜に於ける露国の将来（下）」『国民之友』81号、23年5月3日、35頁。「朝鮮を如何せん」『国民新聞』24年3月14日社説、「西比利亜鉄道」『国民新聞』25年8月26日。「国民新聞」復刻刊行会編の復刻版『国民新聞』（日本図書センター、昭和61年-1991年）を使用した。以下同様。

17 「朝鮮独立の担保」『国民新聞』明治27年6月12日社説。無署名であるが、文体から蘇峰執筆と判断した。「朝鮮問題の真相」『国民之友』285号、29年2月29日社説、1-2頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。

28年、イギリス東アフリカ会社からケニアを接収し、29年にはアシャンティを保護国とした。¹⁸ そうした中で蘇峰は、太平洋におけるイギリス（あるいはフランス、ドイツ）進出を憂えて次のように述べている。欧州諸強国は太平洋の島々の占領に汲々としている。太平洋に駅路を開こうというのは明らかであり、パナマ運河が開鑿されれば、そこから東洋に侵入して跋扈を逞しくするだろう。これは考え合わせるべき問題だと蘇峰はいう。¹⁹

そうした一方で、イギリスは日本外交の悲願であった安政五カ国条約をはじめとするいわゆる不平等条約の改正に最も強硬な態度を示した。イギリス以外の国、例えばアメリカが明治11年の吉田・エヴァーツ条約において、またアメリカ、ドイツ、ロシアが22年の大隈重信外相の改正草案に対して日本に歩み寄りを見せる中で、イギリス駐日公使フランシス・プランケット、ヒュー・フレイザーは日本の治外法権撤廃要求に対して「敵意に満ちた対応」を見せた。さらに反日気質の根強い在日イギリス人は日本の改正草案への反対運動を行うとともに、日本軽視の傾向が強く、日本が将来重要な相手国になるとは考えず、日清戦争の結果が出るまで清国の方を重視した。²⁰ こうしたイギリス側の態度の背景の一つに人種偏見があったことは否めない。先行研究によると当時のイギリス人は、日本人が「高度な趣味と知性」をもつ一方で、「子供ないしは未開人のきわめて多くの残滓」を帯びているというイメージを抱いていた。²¹ 他方、日本人はイギリス人が自分たちに向けた軽侮の眼差しを鋭敏に感じ取っている。そうしたイギリス側の姿勢は日本人の自尊心を傷つけ、とりわけ明治19年のノルマントン号事件と24年の千島艦事件は、日本人に治外法権の屈辱を意識させる象徴的な出来事となった。

こうした中で、蘇峰はイギリスに対する怒りを募らせていた。ノルマントン号事件に言及した蘇峰は、義、まさに死すべき〔イギリス人〕船長、機関手は死なず、〔日本人〕船客はことごとく死んだと悲憤の声を洩らし、さらに横浜商人が生糸その他の貿易をめぐる外国人商人とトラブルになると、外商のために「凌轢」されてしまうと慷慨する。²² そうした中で蘇峰が念願したのは「蹂躪せられ

18 Ronald Hyam, *Britain's Imperial Century, 1815-1914: A Study of Empire and Expansion*, 2d ed. (Lanham, MD: Barnes & Noble Books, 1993), 209, 212, 214.

19 「日本の国防を論ず 第八」『国民之友』明治21年11月2日、11頁。

20 J・E・ホア「不平等条約の時代——1858—1899年の日英関係」『日英交流史 1600—2000 1』140—144頁。日本人の感情に対する歩み寄りは明治27年の日英通商航海条約調印によって初めてなされたが、それは遅きに失し、そこには傷が残されたとホア氏は指摘する。

21 東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』（ミネルヴァ書房、1997年第1版第二刷）222頁。その他に本稿の対象とする期間からずれるが、Toshio Yokoyama, *Japan in the Victorian Mind: A Study of Stereotyped Images of a Nation 1850-80* (London: The Macmillan Press, 1987) も参考となる。

たる権利を回復し、日本の躰面と利益とを保全する所の条約」であった。しかしそこに立ちはだかるのは、「最恵国條款を楯となし、頑固にも常に我邦条約改正の談判に於て、やかましやの隊長たる英国」であるという。²³ この蘇峰の心情は『国民之友』『国民新聞』に反映され、例えば『国民之友』は「英人の横恣」と不平等条約の「恥辱」を訴え、明治27年の日英通商航海条約調印によって領事裁判権の撤廃が約された際ですら、英国がこれでわが国民の歡心を得たと思ったら大早計だ、日本国民が不平等条約「三十年間の不幸」を忘れるには、イギリス人にまだなすべきことがあると怒りを洩らしている。²⁴

以上のように、蘇峰はイギリスに屈辱感を覚えていた。しかしながら、そうした感情はイギリスにのみ向けられたのではない。第三に、アメリカについて見てみたい。周知のようにアメリカは条約改正交渉において日本に好意的であり、当時の日米関係はおおむね良好であった。そうした雰囲気を反映して蘇峰もアメリカに親愛の情を示すことが多かったが、その一方で、アメリカに憤りを示す場合もあった。それは主として「日本人を軽侮するアメリカ人」への怒りであった。明治26年、蘇峰は日本国内の西洋人居留地の「弊害」を訴えるキャンペーンを張ったが、その内容をできるだけ原文に即して要約すると以下ようになる。²⁵

- ① 横浜のイギリス領事裁判所、瀬戸内海で水雷砲艦千島を衝突沈没させた英国 P & O 汽船会社のラベンナ号に無罪を宣告（『国民之友』1月13日）
- ② 日本政府、千島艦事件の損害賠償を P & O 汽船会社に要求しイギリス領事館に提訴（5月13日）

22 「豈に必ずしも」『国民之友』49号、明治22年5月2日時事欄、44頁。時事欄は17の記事からなるが、最後に「四月二十八日脱稿」とあるので同一人物がすべて書いたと考えられる。その中の一つに板垣退助の徳富猪一郎宛書簡が紹介され、また別の中で蘇峰の愛読書であったトクヴィルが引用されていることなどから、「豈に必ずしも」も蘇峰筆と判断した。「平民的運動の新現象」『国民之友』69号、23年1月3日、7頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。

23 『国民之友』49号、明治22年5月2日、時事欄、41頁。「条約改正、其の来歴、其の結果」『国民之友』55号、22年7月2日、11-12頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。

24 『国民之友』208号、明治26年11月13日、時事欄、38頁、「英国東洋政略の急変及び其使臣」『国民之友』234号、27年9月3日社説、3頁。なお当時の言論界を知るには、岡義武「条約改正論議に現われた当時の対外意識」（一）（二・完）『国家学会雑誌』67巻1・2号、3・4号、昭和28年8、9月が参考となる。

25 蘇峰は「平民的進歩主義と国民的精神」『国民之友』222号、明治27年4月3日社説、3頁において、吾人は昨年（明治26年）、居留地の弊害を調査し、これを世上の識者に訴えたと述べている。それに該当する記事を探すと、ここに掲げた15項目を見出すことができる。各項の最後に付した日付は、その記事を掲載した『国民之友』の発行月日である。なお上記の社説が蘇峰筆であることは、和田「年譜」による。

- ③ 旅行券なくして内地を旅行し、我が官吏の検閲に応じない外人の専横あり（5月23日）
- ④ 米領事庁執行吏フランク・ネビルス、我邦の無頼漢と共謀して少女を含む幾十の淫売婦を誘拐（5月23日）
- ⑤ 横浜居留地山手130番館主の某、鎌倉に広大な土地購入、その周旋をしたのは神奈川県書記官某、名義人は同外事課属なり（6月13日）
- ⑥ アメリカ領事裁判所、フランク・ネヴィルスを品行方正として無罪宣告（6月13日）
- ⑦ P&O汽船会社、逆にラベンナ号の損害賠償を日本側に請求す（6月13日）
- ⑧ 米人コーブランド、我国細民の少女を誘って娼楼を居留地に設立、治外法権を楯に営業するも、居留警察に取り押さえられ、領事より求刑さる。外人の日本来遊目的は風光や美術にあらず（6月23日）
- ⑨ ドイツ人ライメル、熊本で邦人を殴打、憲兵の拘引を逃れ、汽車に投じ去る（7月3日）
- ⑩ 横浜居留地に39の売淫窟あり、そのうちの32は欧米婦人（7月3日）
- ⑪ 前橋に外人宣教師所有の土地二個、須磨に鉄道庁雇英人ページ所有の土地3反8畝あり（7月23日）
- ⑫ 米人ウィレット、馬丁彦助なる者を三度銃撃、殺意明白なるも米領事は無罪宣告（8月23日）
- ⑬ 居留地の代言人ラーダー、逆に彦助を謀殺未遂犯として横浜裁判所検事局に求刑す（8月23日）
- ⑭ 神戸の英人ヘンリースチン、仏人クリスタール、アーロンなる者、未成年の日本貿易商手代を電気に触れさせ卒倒負傷さす（10月13日）
- ⑮ 千島艦事件に対する上海英国上等裁判所、瀬戸内海を日本の領海にあらずとして、P&O汽船会社を支持（11月13日）

これを見ると、イギリス人だけでなくアメリカ人、ドイツ人、フランス人の例もあがっており、中でもアメリカ人がイギリス人と並んで最も取り上げられる回数が多い。すなわち、(1)米領事館員が日本人売春婦を誘拐したが、米領事裁判所は当人に無罪を宣告した、(2)アメリカ人が居留地に貧しい日本人少女を囲った遊郭を作った、(3)アメリカ人が日本人馬丁を三度銃で撃ったが、米側の弁護士は馬丁こそが加害者だと訴えた、というものである。これらの事件は蘇峰や配下の記者が直接取材したのか、それとも伝聞によるものかは明らかにされていない。したがって事実の検証が必要であろうが、ここでいえるのは、各記事が真実か否かは別として、いずれも治外法権の下で日本人を軽く見、思うままにふるまうアメ

リカ人という印象を与えることである。五十年後の日英米戦争中、蘇峰は「私共はアメリカ人や、イギリス人が、日本で無闇矢鱈に威張り散らした時代をよく知つてゐて、何時かはひとつ、奴等を殴つてやりたいと思つてゐた」と述べているが、²⁶ そうした感情は以上のような報告に触れる中で刻み込まれていったと考えられる。

しかしながら、蘇峰にとってアメリカ人による日本人軽侮の最も象徴的な事件は、何よりもまずマシュー・C・ペリー提督の砲艦外交による日本開国であった。ペリー来航時、蘇峰は生まれていなかったが、遅くとも同志社英学校退学直後の明治14年の時点でかれの心には開国の屈辱感が刻まれていた。²⁷ その後、明治21年、蘇峰は欧米諸強国がかつて「堅艦利砲ヲ擁シ驀然我カ内海ニ闖入シ。我ニ迫ルニ。開国通商ノ議ヲ以テセリ」と苦い思いをよみがえらせ、²⁸ 同27年には次のように述べている。開国は正理だが、外国の強迫によって開国させられたことは屈辱であり、容易に拭うことのできない我が国史の汚点である。我邦の開国は結婚の名による強姦か、強姦の仮相による結婚か、いずれにしても我が開国は脅迫、恫喝によって行われたことは争うことのできない事実であるという。²⁹ こうした「日本人を侮る傲慢なアメリカ人」という怒りは、蘇峰の心中に絶えず燻ぶっていた。かれは次のようにも述べている。欧米人は日本国民を猿猴に接近した人類、または人類に接近した猿猴と思っているに違いない。彼らは日本国民が三千年来の文明をもつ上、他国の文明を同化する力を備えた点に気がつかず、日本文明の急進を風変わりな見物として嘲笑的に扱った。我が国民は世界の人類より受けるべき〔当然の〕待遇すら受けることができないと蘇峰は嘆く。³⁰ ここでいう「日本人を猿とみなす欧米人」は、いうまでもなくアメリカ人を含んでいる。蘇峰に

26 拙著『近代日本人のアメリカ観』201頁。

27 同上、89、121頁。拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー」70頁、「少年期の徳富蘇峰とアメリカ」34頁。

28 徳富猪一郎『新日本之青年』（明治20年4月）『蘇峰集』所収、128頁。

29 徳富猪一郎『大日本膨脹論』（明治27年12月）『蘇峰集』所収、261頁。この蘇峰におけるペリー・ショックのトラウマについては、米原『『膨脹』する『大日本』』50-51頁、『近代日本のアイデンティティ』174-175頁、『徳富蘇峰』120頁も着目している。米原氏は、『大日本膨脹論』に一貫して流れるのは「傷つけられた自尊心の回復というモチーフ」であるという重要な指摘を行っている。ペリー・ショックについては、岸田秀氏のユニークな研究、『黒船幻想 精神分析学から見た日米関係』（トレヴィル、昭和61年）、『日本がアメリカを救す日』（毎日新聞社、2001年）を参照。またその後の蘇峰にペリーの開国に対する屈辱感がつきまとった点は、拙著『近代日本人のアメリカ観』66-67、92、190頁。

30 徳富『大日本膨脹論』265頁。上記、米原氏の研究もこの点に着目し、引用している。

31 同上、269頁。

よると、海外に旅行した者はみな侮蔑の苦い経験を嘗めているというから、³¹ 彼は自分の周辺にいるアメリカ体験者から話を聞いていたのだろう。その一人と考えられる金子堅太郎は『国民新聞』の中で次のように語る。³² 欧米に行った我が留学生は勤勉、温順だと誉められるが、これは殊勝にも白人の間にはるばるやって来て、よく勉強する奇特者という意味にすぎず、彼らは日本人を「ベツト（寵愛）するまでにてレスペクト（尊重）すると云ふにあらず」と金子はいう。またアメリカ留学中の横井時雄は『国民之友』に以下の意見を寄せている。³³ 「地球上、白哲人種にあらざる者は人にあらず」というのが欧米の輿論である。彼らは我邦人を浅慮軽佻の民とみなし、日本人が欧米から学んで起こした文物を「猿猴の模倣品」として冷笑すると横井はいう。

上記のように蘇峰にとってアメリカは、日本を砲艦によって強引に開国させた国であると同時に、白人優越主義にもとづいて日本人に人種偏見を示す国とイメージされていた。そうした中で屈辱感を募らせた蘇峰は、欧米人が日本に向けて発する言葉に殊のほか敏感となった。その一例をあげておきたい。明治12年に来日したユリシーズ・S・グラント前大統領は、明治天皇に告別の謁見をした際、以下のように述べた。³⁴

私は、日本が将来において飛躍的な発展を遂げる可能性を秘めていることを、心に深く銘記して帰国の途につくものであります。……〔日本〕政府の賢明なる指導、国内および外国との平和維持、国事においては諸外国の干渉を防ぎ得たならば、すばらしい発展を遂げることに請け合いです。日本がもち前の偉力を發揮して、今日の欧州列強と同じように、外国の支配を受けることなく、自らその国事を遂行し、文明国の尊敬を受けることができるような時が訪れることを切に望みます。

グラントは日本が外国の干渉を防ぎ、自主的に国事を行うことを待ち望んでい

32 「金子堅太郎氏との談話（つゞき）」『国民新聞』明治23年6月10日。蘇峰自身が金子を直接取材したかどうかは、記事を見る限り不明である。

33 横井時雄「今日の成功は今後の機会のみ」『国民之友』249号、明治28年4月3日、19頁。

34 宮永孝訳『グラント將軍日本訪問記』（雄松堂書店、昭和58年）171頁。蘇峰はグラントのコメントを「グラント氏告別ノ謝詞」『東京日日新聞』明治12年9月4日で知り、それをそのまま『大日本膨脹論』に引用している。

35 徳富『大日本膨脹論』251頁。蘇峰は267-268頁で、表向きグラントに感謝の念を示しているが、内心では屈辱を感じていた。蘇峰が後年までその思いを忘れなかった点は、拙著『近代日本人のアメリカ観』92頁。

るという。これを聞いた蘇峰は一面においてグラントの心配りに感謝したが、反面、これは「我邦を半独立国視したるにあらずや」という怒りを覚えた。³⁵ 列強に領事裁判権を認め、関税自主権をもたない当時の日本は真の独立国ではなく、その点をふまえてグラントは日本の自主独立を希望したのだが、蘇峰にとっては日本人としての自尊心を傷つけられたように感じられたのである。この例に見られるように、欧米人のささいな言葉使いに対しても蘇峰のプライドと被虐感は鋭敏に研ぎ澄まされていたのである。

以上、明治20年代の蘇峰はロシアから南下の重圧感、イギリスから不平等条約の屈辱感を感じ、アメリカからはイギリスほどではなかったにせよ、やはり侮辱を受けたという思いを抱いていた。言い換えればロシアから物理的の圧迫感、イギリス、アメリカから精神的の圧迫感を受けていたのである。前者は安全保障の問題であり、後者はナショナル・プライドと国益の双方がかかった問題であった。その蘇峰が明治28年の三国干渉と遼東還付によって被圧迫感をより一層募らせたことはいうまでもない。三国干渉の衝撃がいかにかい大きいものであったかは、蘇峰自身と他の研究者がすでに述べている通りであり、ここでは再言しない。³⁶ 蘇峰から見れば、欧米からの第一次ショックはペリーの砲艦外交であり、その後、ロシアの東進南下政策が重く心にのしかかり、さらにノルマントン号事件をはじめとして条約改正問題をめぐる屈辱が間断なく蓄積されていた所に、第二次ショックとして三国干渉を受けたことになる。さらに、これは本稿の対象とする時期以降になるが、日露戦争以後は、アメリカの日本移民排斥や黄禍排日論に怒りを貯めていた所に、第三次ショックとして大正2年のカリフォルニア州排日土地法の成立を体験するのである。³⁷ 蘇峰にとって、明治20年代はこのようにアメリカを含む西洋列強からの圧迫感を強めていく過程の一齣に相当したのである。

2 大日本膨脹論とエマソンの応用

欧米に重圧と屈辱を感じる蘇峰が何よりも念願したのは、日本を「歐洲諸国と竝ひ立たん」国、「毫も……譲る所なからしむる」国にすることであった。³⁸ 日本

36 三国干渉に衝撃を受けた蘇峰の混乱を、中村「徳富蘇峰」212-215頁が鋭く描写している。

37 大正13年（1924）の排日移民法が蘇峰に衝撃を与えたことは知られているが、蘇峰を反米に大きくよるめかせたという点で加州排日土地法の方がより大きなショックを彼に与えていると考えられる。拙稿『近代日本人のアメリカ観』65-69頁を参照のこと。

38 「現今の日本は適用の時代なり批評の時代なり」（蘇峰講演）『国民之友』20号、明治21年4月20日、10頁。「嗟呼国民之友生れたり」『国民之友』1号、20年2月、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。

が「太平洋の水、中央亜細亜の野、欧州諸強国と抗衡して、日本の国旗を輝かすこと」、「独り東洋の盟主と云はず、坤円球〔地球〕上、至る所日章の旗と、光栄とを双語同意ならしむること」を望んだのである。³⁹ このように世界における日本の栄光を思い描く蘇峰は、欧米からの圧迫を押し返して日本自身が西洋列強のように拡大すること、西洋の膨脹に対して日本の逆膨脹をはかることが日本の安全と繁栄を保障し、かつナショナル・プライドを満足させるものと考えた。西洋の帝国主義が顕著なこの時代の日本人にとって、「国利民福」⁴⁰を維持、拡張するためには、西洋流の帝国主義をとるのが最も効果的とされ、それ以外の選択肢を考へることは現実には難しかった。その結果、蘇峰は日本の対外膨脹を唱へるに至る。⁴¹

蘇峰が帝国主義的な膨脹論を唱へ始めたのは、明治23年からであることが知られている。⁴² このとき彼はまだ「大日本膨脹論」の語を用いていなかった。しかし同27年に、それまで発表した文章をまとめて『大日本膨脹論』を刊行するまで、議論の主旨は変わらない。そこで本稿では便宜上、明治23年以来唱えてきた膨脹論をまとめて蘇峰の大日本膨脹論と呼ぶことにしたい。その内容についてはすでに多くの先行研究が論じているため、ごく簡単に紹介するにとどめる。第一に「日本人種の新故郷」（明治23年6月）において蘇峰は、日本の過剰人口をフィリピン諸島、マーシャル群島やオーストラリアなどに移民として送り出すとともに、

39 「日本の国防を論ず 第十三」『国民之友』36号、明治21年12月21日、15頁。「民心の統一」『国民之友』218号、27年2月23日、1頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。

40 『国民之友』は国利民福を謀ることを「専一の主眼」としていた。『国民之友』91号、明治23年8月13日、表紙。

41 この点で蘇峰の論理と心情をもっとも正確に理解しているのは渡部昇一氏である。渡部氏は次のように述べている。「蘇峰は明治二十五、六年以降ははっきりした帝国主義者になる。しかし帝国主義を今の語感で解釈してはならないであろう。当時の先進国は英・米・仏・独・露などすべて帝国主義の国であった。帝国主義の国々の民衆の方が、非帝国主義の国々、つまり植民地化された国々の民衆よりはるかに幸福であることは誰の目から見ても明白であった。蘇峰は自分の同胞を、つまり日本人全体を幸福なグループの方に置きたいと心から願ったのである。」渡部「真の戦闘者・徳富蘇峰」230頁。渡部氏は、蘇峰の言論を現代の価値観によって裁くならば、当時の実相が見えてこない点に注意を促している。氏の論文は、上記の引用個所以外にも独創的かつ的確な指摘に満ちており、蘇峰研究の必読文献である。

42 ピアーソン『『国民之友』に現われた民友社の社会・政治思想』『民友社の研究』243頁。

43 「日本人種の新故郷」『国民之友』85号、明治23年6月13日、1-10頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。蘇峰は文中、田口卯吉の南洋商会に触れているが、田口の思想的影響下にあったことが知られる蘇峰は、田口の北守思想、南洋植民論から影響を受けているのではないか。田口については、森久男「田口卯吉の植民論」小島麗逸編『日本帝国主義と東アジア』（アジア経済研究所、1979年）所収、小峰和夫「田口卯吉の描いた開放経済国家日本の進路」杉原四郎、岡田和喜『田口卯吉と東京経済雑誌』（日本経済評論社、1995年）など。

艦隊を南洋諸島に送って日本の国威を輝かし、イギリスの東インド会社にならって南洋貿易会社を興すことが必要であると説いた。⁴³ 第二に『大日本膨脹論』（明治27年12月）において蘇峰は、日本の人口増大を考えると日本の面積を60年間で二倍しなければ人口と面積のバランスを保つことができず膨脹の必要を訴え、日清戦争に勝利することによって軍事戦略拠点としての旅順と南方進出の足がかりとしての台湾を領有し、それを基礎に北守南進を行うとともに、清英露三国に対抗して東アジアに覇権を揮うよう主張した。⁴⁴ 第三に、「自主的外交の意義」「歴史的に観察したる開国論」（どちらも明治29年2月）において蘇峰は、人口と領土の拡大をはかるだけでなく、文明の恩光によって後進諸国を指導するとともに、白人の世界専横主義を打破して人類のために一大平等社会を拓くべきだとした。⁴⁵

以上のように蘇峰は、第一に太平洋とその沿岸諸地域に移民を送り出すことにより日本人の開発地域を広げること（広義の植民地）、第二に西洋列強の支配が手薄な南洋に移民を送り、海軍の保護下、国策会社を用いて貿易を盛んにすること、さらに日清戦争に勝つことによって旅順と台湾を獲得支配すること（狭義の植民地）、第三に南方へさらに膨脹しつつ「後進国を文明化」することを提唱した。このように蘇峰の膨脹論は時を迫って、移住による経済開発から属領支配へと積極性を増している。今日の価値観からそうした議論の表面だけを見ると、侵略的で攻撃的な印象を与える。しかしながらその裏面に看取できるのは、欧米から圧迫される自国にとすると自信が揺らぎかける心理である。すでに述べたとおり日本が欧米から軽侮され、押さえつけられているとする蘇峰は、西洋列強よりも弱体な自国を感じ、そこに劣等感を抱かざるを得なかった。先学が指摘するように、大日本膨脹論を主張する以前、蘇峰はチャールズ・W・ディルク『英連邦の問題』（*Problems of Greater Britain*）を読んでいた。⁴⁶ ディルクは「日本人は精力的に活動しているが、アジアの三大強国に数えられるのはロシア、シナ、イギリスだけである」とし、⁴⁷ ロシアに対抗できる「英清同盟は真の平和同盟になるだろう」と述べている。この時代の強さ、パワーとは膨脹力のことであるか

44 徳富『大日本膨脹論』『蘇峰集』所収。もともと明治27年6月に『国民之友』に掲載された「日本国民の膨脹性」をはじめとする評論を集めたもの。なお、蘇峰は「北守南進」の語は用いていないが、いわんとする所はその通りである。ビン・シン『評伝 徳富蘇峰』66頁を参照。

45 「自主的外交の意義」『国民之友』282号、29年2月8日、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。蘇峰生「歴史的に観察したる開国論」『国民之友』284号、明治29年2月22日。

46 ピアーソン「『国民之友』に現われた民友社の社会・政治思想」『民友社の研究』243-244頁、Pierson, *Tokutomi Sohō*, 226が指摘したディルクの影響を宮本盛太郎氏が発展させ、『知識人と西欧』57-67、80頁で論じている。

ら、英露清はアジアの膨脹的帝国主義国として最有力だが、日本は失格の烙印が押されたことになる。蘇峰はそうした個所にラインを引いて注目し、英清同盟の件には「何等の放言ぞ」と余白に怒りを書き込んでいる。⁴⁸ 同書を読んだ後、蘇峰は大日本膨脹論の中でディルクの見解を取り上げ、英清にくらべると日本の植民、膨脹が進んでいないことを認めつつ、しかし日本人種の先祖は臆病者ばかりではないとして4世紀ごろの任那日本府の設置、「神功皇后の三韓征伐」、13～16世紀の倭寇の活動や16世紀の東南アジアに作られた日本町といった例をあげて次のように述べた。我々は五百年前や三百年前に先祖が行ったこと〔対外膨脹〕を繰り返すにすぎないのだと蘇峰はいう。⁴⁹ 歴史の先例を引いて自国の膨脹の必然を裏付ける手法は、ジョン・R・シーリー『イングランド膨脹史』(*The Expansion of England*) にヒントを得たのではないかと考えられるが、⁵⁰ このよ

47 Charles Wentworth Dilke, *Problems of Greater Britain* (London: Macmillan and Co., 1890), 392. 財団法人石川文化事業財団・お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書には、該当個所に青のアンダーラインと赤のサイドラインが入っている。なお、蘇峰は同書の第四部「インド」の第1章「インドの防衛」第2章「英領インド」に多くの書き込みを行っており、中央アジアをめぐるロシアの南下とイギリスのインド防衛に注目していたことがうかがえる。そこにはシベリア鉄道や東アジアをめぐる英露の衝突についても言及されている。蘇峰が同書から膨脹思想やシナ人膨脹のイメージを受容したことはもちろん考えられるが、それ以上に英露関係の記述に興味を向けていた形跡がある。

48 Ibid., 534. 該当個所に赤のアンダーラインと青文字で「英清連合は平和同盟也」、赤文字で「何等の放言ぞ」とある。これらの文字は太字で力強く書き込まれており、蘇峰の感情がこもっていることがうかがえる。

49 「日本人種の新故郷」2-4頁、徳富『大日本膨脹論』246頁。

50 ピアソン『『国民之友』に現われた民友社の社会・政治思想』『民友社の研究』243頁、Pierson, *Tokutomi Sohō*, 226が指摘したシーリーの影響を、宮本盛太郎氏が発展させて『知識人と西欧』57-67、80頁の中で論じている。ただし宮本氏はシーリーが直接、蘇峰に与えた具体的内容にまでは踏み込んでいない。お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、J. R. Seeley, *The Expansion of England: Two Courses of Lectures* (London: Macmillan and Co., 1891) を見ると、シーリーは「イングランドが長い間、示してきた膨脹の傾向を歴史的に検証する」ことを狙いとしており(16頁)、その目的に沿って17世紀以来の歴史を記述しており、蘇峰はそうした本書の特徴をヒントの一つにしていると考えられる。ただし、旧蔵書には明らかに蘇峰の筆跡と認められる書き込み以外に、他の人物による文字やラインも入っており、注意が必要である。なお、筆者はかつて蘇峰が同書を読んだのは「明治24年(1891)頃」とした(『近代日本人のアメリカ観』93頁)。ジャーナリストであるだけに好奇心の旺盛な蘇峰は新刊本が出ると直ちに購入して読むケースが多いため、出版年の1891年頃と推定したのだが、旧蔵書の裏表紙見返しを見ると「8/93アンヤナ」の書き込みがある。類似の数字、符号が他の旧蔵書にも見られるため、これは丸善が業務用に入れた文字ではないかとも考えられる。そうだとすると、蘇峰は1891年ではなく、1893年(明治26年)8月以降に同書を手し、目を通した可能性が生じる。いずれにせよ、現時点では蘇峰がシーリーを読んだ年を確定するのは難しく、早ければ出版年の1891年以降、さもなければ1893年8月以降の場合もあるといった程度の推測をすることにせざるを得ない。

うに蘇峰は日本人にも膨脹力があるのだということを強調し、西洋コンプレックスに悩む日本人、もしくは自分自身の自信を呼び起こそうと試みている。

そうした際、蘇峰に希望を与えたのは、チャールズ・H・ピアソン『民族の生命と特性』(*National Life and Character*)であった。ピアソンは有色人種の人口増大が白色人種のそれをはるかに上回ることを指摘し、これまでの白人の膨脹に対して黄人、黒人の逆膨脹が始まり、やがて白人の支配を覆すことを警告したが、同書を読んだ蘇峰は「愉快」に堪えなかったという。⁵¹ 蘇峰はピアソンの見解からヒントを得て、「白人は植民地を作っても暑さに弱く気候に制圧されてしまう」と西洋人の弱点を強調し、他方、強剛な日本人は気候を征服するのだとして自国の強みを力説した。⁵² ここにも西洋に屈服しないよう足を踏みしめ、日本人に自信を植え付けようと格闘する蘇峰の姿を見出すことができる。

ここで興味深いのは、蘇峰が大日本膨脹論の中で「自信力」の語を用い、その必要性を強調している点である。その主張をまとめると、蘇峰は以下のように述べている。我が国民には自信力が乏しいという大きな欠点がある。しかし、人間は自分が立ちたいと望む位置に立つことができるものだ。人は勢力があるから自信力をもつのではなく、自信力があるからそれに応じて勢力をもつのである。「自信力はすべての大動機なり。」国家も同じで、我邦を雄大にするかどうかは国民の自信力にかかっている。もし自国を貧弱であると考えれば、我邦は本当に貧国、弱国となり、外国人と競争できず、外に向かって頭を伸ばすことができない。ところが個人の脳底に大日本の膨脹が湧き上がるならば、その後、外形において大日本の膨脹を見るのだ。自信力はすなわち「大日本膨脹の精要」である。我々の先祖は千年前にインド、シナ、朝鮮の文明を、16世紀以後は絶えず西洋文明を取り入れ、その蓄積があればこそ今日の急成長があるのであり、こうした史実が日本国民に自信力を与えてくれるのである。さらに清国との戦闘の勝利は我が国民の偉大な性格を示している。「自家の偉大なるを自信するは、さらに自家を偉大ならしむる所以」である。この戦争〔日清戦争〕に勝利を得れば、日本は他の膨脹的国民と対等の地位を占め、世界の大競場で角逐できるようになると蘇峰はいう。⁵³ このように蘇峰は、①日本の膨脹と繁栄には国民の自信が不可欠である、②日本の歴史を見れば日本人は自信をもって当然である、③日清戦争に勝って自

51 拙著『近代日本人のアメリカ観』199-200頁。

52 徳富『大日本膨脹論』248-249頁。

53 同上、250、255、261-262、「国歩艱難に処する国民の自信力」『国民之友』89号、明治23年7月23日、11頁（文体から蘇峰筆と判断した）、蘇峰生「日本文明の淵源」『国民新聞』明治26年6月4日。

信を得ればさらに飛躍できる、の三点を主張した。そうすることによって、西洋の膨脹に圧倒されがちな日本国民と自分自身を勇気づけ、励まそうとしたのである。

ここで見られる「自信こそが個人の、ひいては国家の膨脹をもたらす」という蘇峰の発想は何に由来するのだろうか。「自信力」なる概念は蘇峰のオリジナルの考えなのか、それとも他者から影響を受けているのか。結論を先にいうと、蘇峰は第一に自分自身の体験から、第二にエマソンの著作から刺激を受けて「自信力と膨脹」のイメージを得たと考えられる。蘇峰は同志社英学校時代に山崎為徳から、その後は大西祝からエマソンの名を聞いていた。⁵⁴ しかし蘇峰がエマソンを最初に読んだのは、『将来之日本』の原稿を携えて上京中の明治19年8月であった。このとき『代表的人物』(*Representative Men*)と『イギリス国民性』(*English Traits*)を読んだ蘇峰は、⁵⁵ その直後に『将来之日本』によって文壇で認められ、翌20年2月に『国民之友』を刊行して名をあげ、一挙に立身出世を果たした。しかしそれは偶然の産物ではなかった。同志社時代から新聞記者になるという志を抱いた蘇峰は、同校退学後、東京に出て憧れの福地源一郎の門を何度も叩いたが、まったく相手にされなかったという。悔しい思いをした蘇峰は「自ら頭を下げて他人に頼み歩かんよりも、頭を下げて我を迎える日を待つにしかず」と覚悟を決め、熊本に帰り、大江義塾で教えるかたわら勉学に精進した。⁵⁶ このように他人への依頼心を捨て、ジャーナリストとしての自分の適性と潜在能力のみを信じ、雌伏の時期にあっても志を曲げず、ついにその才能を開花させた蘇峰は、自己の生き方に強い自信を得たと考えられる。その後も蘇峰はエマソンを読み続け、明治21年にエマソンからヒントを得て「インスピレーション」「新日本の詩人」を書いたことは既述の通りであり、さらに23年にはエマソンへの傾倒を次のように語っている。⁵⁷

54 『蘇峰自伝』(昭和10年11月第50版、中央公論社)106-107頁、徳富蘇峰『読書法』(講談社学術文庫、昭和56年)45頁。

55 お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、R. W. Emerson, *Representative Men* (London: George Routledge and Sons, undated)の表紙見返しに「Tokutomy 1886. Tokio」のサインと「蘇峰学人 是書明治十九年八月携帶自東京到于上州磯部途中所読也 同行湯浅治郎氏也〔中略〕明治四十一六月十三」、最終頁(182頁)に「at Isobe With my sister 19th August 1886」の書き込みがある。また同じく成篁堂文庫所蔵のR. W. Emerson, *English Traits* (London: George Routledge and Sons, undated)の裏表紙見返しに「蘇峰学人 是書明治十九年八月於東京所購読也 予識惠磨遜〔エマソン〕先生実以此及代表人物論為嚆矢矣〔中略〕明治四十一六月十三夕」とある。

56 徳富『読書法』33-34、37頁。

57 蘇峯生「文明論に題す」『国民之友』74号、明治23年2月23日、20頁。

余平生好んで〔エメルソン〕先生の文を読む、特に勤勞、正善、篤行、総て精神的の生活中に於て、其の幸福を求めしむる先生の福音に随喜するものなり、

そうした中で蘇峰がとくに魅かれた文章の一つに、もともとエマソンの『エッセイ第一集』(*Essays, First Series*)に収録された「自己信頼」(‘Self-Reliance’)があった。エマソンはこの「自己信頼」の中で他人の意見に頼ることを戒め、自分自身、すなわち自分の内面から湧き上がる本能と直感を信じるこそが正しい生き方であり、人生の勝利者になる道である旨を説いた。エマソンによると、プラトンやミルトンのような偉大な賢人、詩人は他人が言ったことを気にかけず、自分の考えたことのみを語った。偉人に限らず、人は皆、己れの内部に存在する霊の本質というべき本能、直感に従い、自分自身の内面から行為を発動するのが正しいのであって、それ以外のものに従うならば本当の生き方にはならない。人の真似をするのは自殺行為である。自分の本性に従い、自分の価値を知り、自己信頼を実行すれば、必ず新しい能力が現われ、事業や生き方に革命が起こる。君に割り当てられていることをやれば、いくら壮大な希望を抱いても、少しも出過ぎたことにはならないのだ。このようにエマソンは自分を信頼する者こそが自己実現を果たし、大きな世界を開くことを主張した。⁵⁸

「自己信頼」はそれまでの蘇峰がまさに実践してきたことである。福地邸で門前払いを受けた後、人に頼らず自分を信じて奮闘努力した結果、成功を手にした蘇峰は、エマソンの言葉を聞いて大いに納得する所があったに違いない。エマソンを読む前から、蘇峰の心にはエマソンの意見を受け入れる素地ができていたからである。エマソンの言葉は蘇峰の確信を強め、裏付けるものであっただろう。お茶の水図書館成實堂文庫に明治20年代の蘇峰が読んだと考えられるエマソン著作集が保存されている。⁵⁹ その第2巻『随筆集』をひもとくと、「自己信頼」の章には多くの書き込みがなされており、彼がそこから相当の感銘を受けていること

58 酒本雅之訳「自己信頼」『エマソン論文集』(上)(岩波文庫、1990年第10刷)所収、189-239頁。以下、エマソンの引用は酒本氏の訳による。

59 蘇峰の旧蔵書を調べると、明治17年(1884)から21年(1888)発行のエマソン著作集(お茶の水図書館成實堂文庫所蔵)と、明治36年(1903)から大正7年(1918)発行のエマソン全集(同志社大学今出川校地図書館徳富文庫所蔵)の二種類がある。明治20年代の蘇峰が読んだと考えられる版は、前者の著作集である。それはロンドンのマクミラン社発行の「ラルフ・ウォルドー・エマソン著作集」であるが、蘇峰のコレクションは第1巻『雑録集』(*Miscellanies*)、第2巻『随筆集』(*Essays*)、第5巻『人生の行い、社会と孤独』(*The Conduct of Life and Society and Solitude*)、第6巻『書簡と社会の目的』(*Letters and Social Aims*)の四冊で、全巻揃いではない。

がわかる。例えば次のような個所である。⁶⁰

自分自身の思想を信じること、自分にとって自分の心の奥で真実だと思えることは、万人にとっても真実だと信じること、——それが普遍的な精神というものなのだ。

教育を受けているうちに、ある時期がくると、誰しも、羨望が無知であり、模倣が自殺であり、よかれあしかれ自分自身をおのれの天命だと思わねばならず、……

君自身に固執したまえ、ゆめ模倣などしてはならぬ。……偉人は誰でもたったひとりだ。……シェイクスピアを研究することでシェイクスピアが作られることはけっしてないだろう。

ひとが強くなり、勝利者となる姿がわたしの目に見えるのは、そのひとが外来の支えをいっさいとり除き、ひとり立ちするときに限る。

このように自分を信頼して自主独立の道を雄雄しく歩くべきだというエマソンの発想を、蘇峰は自己の文章にも取り入れていった。例えばエマソンが「偉大だということは誤解されるということだ」と述べると、蘇峰はそれをを用いて「青年よ、青年よ、大ならんと欲するは、人に誤解せらるゝの道也」と記し、明治の書生が自分の信じる道を邁進するよう励ましている。⁶¹ またエマソンの「自己信頼」の中でとくに名文であるのは次の個所であろう。蘇峰はそこにもアンダーラインを加えている。⁶²

おのれを信ぜよ、その鉄製の絃がひびけばあらゆる心が感応して震える。

60 Ralph Waldo Emerson, "Self-Reliance," *Essays* (London: Macmillan and Co., 1885), 37, 38, 67, 71. それぞれ薄い赤茶色の鉛筆によるラインが記され、シェイクスピアの個所には余白に「妙々」とある。その他にも「然り」「大人の心地道破し来りて候」「大活眼」などの文字も記されている。なお、同巻には大正14年に再読した際の黒ペンによる書き入れもあり、また他巻には明治34、35年に読んだ際の赤鉛筆による太字の書き込みがあるため注意が必要である。

61 Ibid., 47. 薄い赤茶色のアンダーラインと「妙々」の文字がある。「自信」『国民之友』202号、明治26年9月13日、17頁、文体から蘇峰筆と判断した。

62 Ibid., 39. 薄い赤茶色のアンダーライン。

この詩的な一節を蘇峰はよほど気に入ったのであろう。彼自身、これを訳して「自己を信せよ、萬つの心は此の鉄線によりて鳴震するものなり」としているし、⁶³『吉田松陰』の冒頭にその原文「Trust thyself: every heart vibrates to that iron string. — Emerson.」を掲げている。⁶⁴ その他にも蘇峰は「自己信頼」以外のエマソンの文章、例えば「成功」(‘Success’)からも同様の精神を受け止めていた。⁶⁵

自信〔self-trust〕は成功の第一の秘訣である。あなたがここにいるのは宇宙の支配者がそうしたのであり、何か目的があって、またはある使命を果たすために、あなたの位置を厳密に定めたのである。そしてそれに従事している限り、あなたは首尾よく成功するのである。

蘇峰が力説した「自信力」の語は、エマソンのいう self-reliance (self-trust) を翻訳したものであると考えられる。蘇峰は、エマソンが説く self-reliance が個人の能力を引き出す不思議で霊妙な力、パワーであることを理解していた。そのため、単なる「自信」に「力」の文字を付して「自信力」としたのであろう。そうした点を見ると、蘇峰のエマソン咀嚼は決して浅くない、それどころか相当の深さをもっていたことがうかがえる。当時の非ヨーロッパ世界で蘇峰のようにエマソンを読み込み、それに共鳴できるだけの知性と教養をもっていた人物は、果たしてどれくらいいただろうか。⁶⁶

若き蘇峰は自己信頼によってジャーナリストとしての成功を果たし、その直後に、エマソンから自己信頼の概念を教わり、その重要性を改めて実感したのである。しかしながらその後、蘇峰とエマソンの自己信頼には一つの違いが生じている。エマソンは自己を信じることによって自分の能力を開発し、より大きな自分

63 「君子国の真君子 中村敬字翁」『国民之友』122号、明治24年6月23日、7頁。文中に、吾人はかつて『国民之友』17号で福沢諭吉を物質の文明、新島襄を精神的文明の代表者としたとあり、17号(明治21年3月2日)を調べると「福沢諭吉君と新島襄君」がそれに該当する。和田「年譜」によるとこれは蘇峰筆であるから、「君子国の真君子 中村敬字翁」も蘇峰執筆であることがわかる。

64 徳富蘇峰『吉田松陰』(明治26年12月)(岩波文庫、1990年第14刷)冒頭。

65 Ralph Waldo Emerson, “Success,” *The Conduct of Life and Society and Solitude* (London: Macmillan and Co., 1888), 487. お茶の水図書館成笈堂文庫所蔵。薄い赤茶色のアンダーライン。拙訳を掲げた。

66 木村毅『日米文学交流史の研究』(恒文社、1982年)316-319頁は、後年の蘇峰がエマソンを多年にかけて愛読し、「体臭として、発散する」までに至った結果、邦文のエマソン論中、第一に指を屈すべき佳篇「恵磨遜」を書いたとして、蘇峰のエマソン理解を高く評価している。

に飛躍することを促すにとどまったが、蘇峰は同じ精神を個人だけでなく、国家のレベルにまで拡大して応用しようとしたのである。つまりエマソンの「自己信頼」はあくまで個人主義に根差すものであったが、蘇峰の「自信力」は個人だけでなく国家主義に立脚していた。「個人膨脹して、国家膨脹す」と信じる蘇峰は、⁶⁷自分が自己信頼によって立身出世を成し遂げたように、日本国民も自己信頼によって日本を膨脹させ、国際地位向上をはかり、偉大な事業をなすべきだと考えたのである。その結果、蘇峰はすでに見たように、日本人の膨脹力を歴史的に解説し、日本人の天職（「後進国指導」「白人専横打破」）を掲げて、国民が自信をもつよう励ました。日本国民が自己を信じることによって、西洋に対抗できるより大きな日本を作ろうと呼びかけたのである。エマソンは自分の思想が東アジアの一国においてこのような形で応用されるとは予想しなかったであろう。

もし現代の日本人がエマソンの思想を知れば、それを私生活に生かすことはあっても、国家のレベルにまで拡大応用するという発想は生まれにくいのではないだろうか。しかし蘇峰にとってそれは自然な発想であった。彼が生きたのは、強力な科学と軍事力をもつ西洋列強が弱肉強食、優勝劣敗を必然とする帝国主義を実行し、アジア植民地化を進める時代である。その中に生まれ育った蘇峰はおのずと強烈な愛国心を抱き、自己と国家を一心同体とみなした。自分が自己信頼によって成功したように、日本国民が自己信頼によって日本を拡大しなければ、日本の「国利民福」はないと考えたのである。蘇峰は自国の置かれた状況と自らの心理に合わせて、エマソンの自己信頼を日本の安全と国益のために応用しようとしたのである。

最後に付言するならば、蘇峰の大日本膨脹論に精神的動揺が透けて見えたように、ロシアの膨脹主義にも同一の性質とはいえないにせよ、一種の劣等感が秘められていた。西欧、とりわけイギリス帝国にコンプレックスをもつロシアの政治エリートは、ヨーロッパで国力を示すことができない反動から中央アジアや東アジアに進出してイギリスと張り合おうとした。そうした地域ではヨーロッパで得られない軍事的成功を収め、威信を高めることができたし、アジア文明化の使命を説くことで自らの劣等感を脇に追いやることができた。明治20年代のロシアではエスペル・E・ウフトムスキー公爵などの「オリエンタリスト」たちがロシア版・東方へのマニフェスト・デスティニーというべき主張を盛んに唱え、ウフトムスキーを伴ってアジアを旅行し、ウラジオストックでシベリア鉄道の起工式に参加した皇太子ニコライ・アレキサンドロヴィッチもそうしたイデオロギーを吸

67 徳富『大日本膨脹論』274頁。

収し、明治27年、皇帝ニコライ二世となってから最初の十年間は極東での膨脹を考え続けた。一方、大蔵省鉄道局長、運輸相、蔵相としてロシアの極東政策に大きな影響力をもち、シベリア鉄道の推進者であったセルゲイ・Y・ウィッチは、アルフレッド・T・マハンの『海上権力史論』に呼応するかのよう鉄道を信じ、陸路の支配による世界的栄光を求めた。⁶⁸ こうして見ると、歴史心理的には西欧、とくにイギリス帝国の膨脹がロシア人のコンプレックスを刺激し、ロシアの膨脹を誘発するという一面があった。蘇峰はこのイギリスが開始し、ロシアに波及した帝国主義に対抗するため、大日本膨脹論という新たな帝国主義を打ち出すのである。

また同時期のアメリカ言論人からも膨脹主義の声が上がっていたが、それは人種主義と表裏一体をなしていた。そこでは英語国民の優秀性が説かれ、アングロサクソン人種はプロテスタントの教義を広めるため、あるいは最後の人種競争のために、ゴッドが意図的に用意したのだという選民思想的な見方が打ち出された。⁶⁹ すでに見たように、このような優越思想とそれにもとづく日本人蔑視に対して蘇峰は怒りを感じていた。したがって、蘇峰の大日本膨脹論にはイギリス、ロシアだけでなく、アメリカの膨脹主義と人種主義への対抗という意味合いも含まれていたといえる。蘇峰は、日本は「開国史の初頁に横抹せられたる〔ペリーの「強姦」という屈辱の〕汚点」を「光芒赫奕たる伸権膨脹史」によって代えなければならないと主張している。⁷⁰ 言い換えれば、西太平洋に進出し、優越心をもって日本に開国を迫ったアメリカに雪辱するため、光栄ある日本の逆膨脹を行おうと訴えているのである。そこにはアメリカの膨脹的、人種優越的態度に対する蘇峰の対抗意識を垣間見ることができる。

蘇峰の論理では、日本に膨脹的脅威を与える列国に遅れをとらないため、あるいはこれらの国々を見返してやるため、日本も同じように膨脹しなければならなかった。第二次世界大戦後、蘇峰は次のように記している。「世界が〔帝国主義という〕ダンスを始めたとき、日本はやむを得ずこれに参加せざるを得ないと考えた。日本の唯一の罪——もしそれが罪であるならば——は、そのステップがぎこちなかったということである。もし日本がダンスをしたという点で犯罪者にな

68 Geyer, 95, 98, 205; Malozemoff, 41-3; Steven G. Marks, *Road to Power: The Trans-Siberian Railroad and the Colonization of Asian Russia 1850-1917* (London: I. B. Tauris & Co., 1991), 136-8, 126.

69 Frederick Merk, *Manifest Destiny and Mission in American History: A Reinterpretation* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1995), 231, 237-41.

70 徳富『大日本膨脹史』261頁。

るならば、他のダンサーたちはすべて日本より幾倍以上の犯罪者である。」これは蘇峰の偽らざる実感であっただろう。⁷¹

3 アメリカとの膨脹衝突への楽観

西洋の膨脹に圧力を感じる蘇峰は、それを押し返すために日本の逆膨脹を唱えた。ここで次のような疑問が生じる。蘇峰は日本からの移民とすでにその地に定住する人々との軋轢を考慮しなかったのであろうか。とくに後年、日米関係を揺るがすことになるアメリカ西海岸での摩擦を予想しなかったのか。また太平洋において日本の膨脹がアメリカの膨脹と衝突することを予測しなかったのだろうか。

まず移民問題について述べたい。蘇峰はこの問題に決して無知ではなかったと考えられる。なぜなら蘇峰の指導下にある『国民之友』『国民新聞』は絶えずそれを報道しているからである。周知のようにアメリカでは日本移民に先立ち、清国人移民への排斥が起こった。明治21年（1888）、アメリカは清国人労働者の移民禁止を最大1928年まで延長する条約について清国と交渉したが受け入れられなかった。そこで米議会はスコット法案を可決して清国人の再入国を許可する証明書を無効にすることとし、S・グローヴァー・クリーヴランド大統領の裁可を得た。⁷² こうしたアメリカの動きを蘇峰は知っており、⁷³ 遅くとも明治23年までには『国民之友』も、今後シナ人だけでなく日本人排斥法も可決される恐れがあるだろうと危惧した。同誌によるとサンフランシスコに出かける日本人には無頼者があり、そういう人間のために日本人全体の体面が傷つけられ、日米貿易にも大きな影響が出ることもあり得る。加えて日本人売春婦の密航も憂えるべき問題である。これらを防がなければ、日本人はシナ人以上に排斥されるだろうというのである。⁷⁴

そうした懸念は実現し、明治23ないし24年頃から西海岸で日本移民の排斥が生じ始める。24年、『国民新聞』は「日本人米国より推戻されんとす」と題し、サンフランシスコで上陸禁止を受けた日本人が現れたことを伝え、翌25年、『国民

71 “Memorandum of My Statement at the Tribunal,” 19（財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団・徳富蘇峰記念館所蔵）。A級戦争犯罪容疑者に指名された蘇峰が国際軍事裁判を想定して書かれた英文弁明書。昭和21年2月28日から3月10日にかけて8回にわけて筆記されている。

72 Roger Daniels, *Asian America: Chinese and Japanese in the United States Since 1850* (Seattle: University of Washington Press, 1988), 56-7.

73 「日本人種の新故郷」（明治23年6月13日）1頁。

74 「日本と米国」『国民之友』23号、明治21年6月1日社説、10-13頁、「海外の売淫婦」『国民之友』120号、24年6月3日時事欄、47-48頁。

之友』は「米人日本人を酷待す」と題して、アイダホ州のアメリカ人が「非日本人十字軍」を組んで日本人労働者を迫害したと報じた。さらに翌26年、サンフランシスコの学務局が日本人にシナ人学校へ行くよう命ずる決議をしたが、間もなくその決定が覆ったと伝えている。⁷⁵ こうした一連の事件に対して『国民之友』『国民新聞』は「米人の偏狭」を嘆きつつも、それは一部のアメリカ人によるものであるとし、他方、日本人移民の生活ぶりや品格が「劣等」であることや「醜業婦」の出稼ぎを指摘して日本側にも大きな原因があるとし、比較的冷静に反応した。⁷⁶ またアメリカよりも朝鮮に移民することを勧めている。⁷⁷ しかしながら、『国民新聞』は落ち着いた表情の陰に次のような屈辱感をみながらせている。⁷⁸

然りと雖一部米人の過誤は、則ち米国全軀の過誤也。米国人にして、若し日本人を遇する此の如くして、止まずんば、我日本国にも亦非米人十字軍の起り来らんことを恐るゝなり。日本人は支那人の如く卑屈無気力の人種にあらざる也。

〔中略〕

……〔日本政府は〕米国政府に談判を開きて、日本人の耻辱を雪がざる可からず。

以上のような『国民之友』『国民新聞』の度重なる報道からうかがえるように、蘇峰も当然、アメリカの日本移民排斥運動を認識していたと考えられる。しかしながら当初、蘇峰の見方は楽観的であった。日本移民排斥が伝えられ始める直前、蘇峰は逆にアメリカへの移民を奨励して次のように述べている。サンフランシスコに五、六千人を下らない我邦人民がいるが、彼らは不浪人にすぎず、政権、公権をもたない。しかしアイルランド人は政権を得たために、米国で勢力をもつよ

75 「日本人米国より推戻されんとす」『国民新聞』明治24年5月15日。「米人日本人を酷待す」『国民之友』166号、明治25年9月13日時事欄、42頁。学童隔離問題については、「在米国邦人の冷遇」『国民之友』196号、26年7月13日時事欄、45頁、「日本人拒絶の決議は取消されたり」『国民之友』198号、26年8月3日時事欄、43頁。同誌は決議取消を報じつつも、それが三転して覆る可能性があるかと懸念している。

76 「外交上の新事」『国民之友』167号、明治25年9月23日大勢一斑欄、37頁、前掲「日本人米国より推戻されんとす」、「米国に於ける我邦人」『国民新聞』明治24年7月23日。

77 「朝鮮移住」『国民新聞』明治24年11月5日社説。なお、「避交渉策を難ず」『国民新聞』明治25年6月30日は、朝鮮移住によって朝鮮の実権を取ることが必要である、我が人民は決して日本拡張の計画に副わない人種ではないと主張している。朝鮮への膨脹はアメリカへのそれと同様、日本の戦略の一つに位置づけられていた。

78 「米国に於ける非日本人十字軍」『国民新聞』明治25年9月6日社説。

うになった。合衆国市民とは合衆国に生まれ、または帰化して、その管轄に属する者を指し（米国憲法14章1条）、その投票権は人種や肌の色、かつて奴隷であったかどうかによって制限されない（15章1条）。したがって、我邦民も帰化すれば合衆国市民となり、文武の官職を得、不動産を所有することもできる。帰化後7年を経れば下院議員、9年で上院議員になることも可能である。このように述べた蘇峰は、アメリカへの更なる移民を促し、彼らがアメリカで「政治にも干渉するに到らんこと」を期待した。彼によると、国家の生存は人種の生存によって決定され、人種を四方に蔓延させることが国家の基礎を固めることになるという。対米移民は日本生存のための戦略の一つとして位置づけられていたのである。⁷⁹

同時期、サンフランシスコの一新聞は「望まれない人々；アジアからの移民の新局面；シナ人にとって代わる日本人；契約労働者と女性の輸入」との見出しを掲げて日本移民の流入を警告し、「日本人はシナ人同様、軽作業に携わりながら白人の少女たちに接触する。多くの家庭はシナ人を雇おうとはしないのに、日本人をコックやメイドとして雇うことが間違いだとは思っていない」と憂えた。また清国移民に反対してきたデニス・ケーニーは反日に転じ、「ジャップは去るべきだ」とのスローガンを掲げた。⁸⁰ 日本人の渡来を恐れるこうした新聞や論者が蘇峰の発言を聞けば、ますます侵略的な印象を深め、日本移民に対して身を固くするであろう。実際、『国民之友』は日本の過剰人口の捌け口として「米州の地に植民地を得る」ことが必要だとまで述べている。⁸¹ ここでいう「植民地」とは現地の経営開発を意味する広義の植民地であって、属領支配の狭義の植民地ではないが、いずれにしてもこれは日本移民を嫌悪する排日家にとって恐るべき発言であるといえよう。しかし管見の及ぶ限りでは、蘇峰がそうした点を考慮した形跡は見られない。

ただし『国民之友』『国民新聞』はその後、明治28年末に至るまで、折に触れて日本移民排斥を報じており、その間に蘇峰も当初の楽観を幾分改めたのではないかと推測される。もっとも両メディアともに、日本に悪感情があるのは西部とくにカリフォルニア州であり、全体を見ればアメリカは世界で最も親日的な国で

79 「日米同盟」『国民之友』116号、明治24年4月23日社説、16-17頁。のち蘇峰生、国民叢書第十冊『経世小策』上巻（民友社、明治29年7月）に収録。この「日米同盟」は当該期蘇峰のもっともまとまったアメリカ観を示している。

80 Daniels, *Asian America*, 111. 前掲、「日本人米国より推戻されんとす」は『サンフランシスコ・クロニクル』の黄禍論的な排日論を取り上げ、「非日本人十字軍」『国民新聞』明治25年9月4日は、低廉の賃金で馬のような仕事をし、野獣のように雑居する日本人は「去らざるべからず」とするケーニーの演説を紹介している。

81 「北海道を如何せん」『国民之友』196号、明治26年7月13日社説、13頁。

あるとし、さらに日清戦争下のアメリカ世論が日本支持に傾いていること、ペンシルヴェニアのあるアメリカ人が日本政府に義勇兵の派遣を申し出たことを伝えており、アメリカはあくまで信頼すべき友好国であるというイメージを前面に押し出していた。⁸² それだけに蘇峰は、移民問題の背後にある黄禍論の根深さに気がついていただけには言い難い。日清戦争後、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世がロシア皇帝に有名な黄禍の絵を送った際、蘇峰はこの「変挺来〔へんてこらい〕な絵」の「おかしき事、馬鹿らしい事、実にヨーロッパ人の目の玉の小さいことが分かる」と難じたものの、日本人に対する彼等の誤解という「障碍を取り除くことは左程難題ではない」と述べている。⁸³ これはドイツ人の場合でありアメリカ人のケースではないにせよ、この時点での蘇峰は黄禍論をやや楽観視していた節がある。彼は書物や他人からの伝聞によって西洋人の人種偏見、反日感情、アジア人への潜在的恐怖心を知っていた。また日露戦争中は西洋の黄禍論を強く警戒したことから明らかなように、同論を決して甘く見たわけではない。⁸⁴ しかしその蘇峰ですら、黄禍論がいかに奥深いものであるかということ、しかもそれがアメリカにも潜んでいることを理解するのは容易ではなかった。そのため日露戦争後、アメリカで日本移民排斥運動や黄禍論的排日論がやむことなく継続すると、蘇峰は大きな衝撃を受けることになる。⁸⁵

第二に太平洋における日米帝国主義の衝突について、蘇峰は予想しなかったのだろうか。明治26年1月、ハワイでアメリカ人支援によるクーデターが起こり、王朝が打倒され、臨時政府が誕生する。いわゆるハワイ革命である。2月、アメリカとハワイ臨時政府は米布併合条約を調印したが、3月、クリーヴランド大統領は条約批准を拒否し、併合は達成されないまま、7月のハワイ共和国誕生に至る。アメリカのハワイ併合中止を聞いた『国民之友』と『国民新聞』は快哉を叫んだ。アメリカが膨脹の手を控えている間に、日本移民をハワイに増殖し、南方

82 「米国の高義」『国民之友』255号、明治28年7月3日時事欄、39頁、「朝鮮に於ける日米の利害」『国民之友』258号、28年8月3日時事欄、38頁、「米国新聞大に日本の声援をなす」『国民新聞』27年8月28日、「世界の舞台に於ける日清戦争」『国民新聞』27年8月30日。

83 前掲、蘇峰生「歴史的に観察したる開国論」（明治29年2月22日）、5頁。

84 日露戦争中の蘇峰と黄禍論については拙著『近代日本人のアメリカ観』8-12頁、米原『徳富蘇峰』159-164頁、日露戦争後については平川祐弘「白人の重荷と黄人の重荷——キプリングと徳富蘇峰——」平川『和魂洋才の系譜 内と外からの明治日本』（河出書房新社、1987年新装版再版）所収、155-171頁。

85 拙著『近代日本人のアメリカ観』第二章。

86 「米元老院布哇合併問題を否決す」『国民新聞』明治26年3月2日、「布哇に於ける日本の位地」『国民新聞』26年4月23日、「外交方針の試金石」『国民之友』209号、26年11月23日社説、4-7頁、「布哇問題」『国民之友』209号、26年11月23日時事欄、38-39頁。

への勢力拡大の足がかりにできるからである。両メディアは在留邦人が参政権、ハワイ国籍を獲得するため、軍艦浪速だけでなく外交官を派遣するよう主張し、ハワイを日本人の（広義の）植民地にすることを望んだ。⁸⁶ このように、明治26年より蘇峰指揮下のメディアには、ハワイへの膨脹をめぐるアメリカとの競争心が表れ始めている。

しかし前述のようにクリーヴランドはハワイ併合を実行せず、アメリカが帝国主義へ完全に傾いたかどうかは『国民之友』も判断が下せなかった。同誌はアメリカでアルフレッド・T・マハンに代表される海外膨脹主義とカール・シュルツに見る反帝国主義の二つの潮流があることを知っており、そのどちらがアメリカの主流を占めることになるか決めかねた。⁸⁷ しかし遅くとも明治28年になると、アメリカの膨脹を明白に認識するようになる。その典型例は「合衆国の外交」と題した記事である。これは、アメリカが海軍を拡張して太平洋に進出する可能性を示唆している。それによると合衆国は建国以来、非干渉の対外方針をとってきた。しかし列国の競争が激しさを加え、国民的膨脹の運動を止めることができなくなった今日、アメリカは無意識のうちにモンロー主義をできるだけ広く解釈する傾向にある。とくに海軍拡張は合衆国人民の注目する問題となり、マハン大佐は米海軍の拡張と新時代の新事業に密接な関係があることを説いた。トマス・ジェファソンのように海軍設置を不可とする者がいた時代を思うと驚くべき変化である。20世紀は合衆国の勢力が国際政治に著しく顕われる時代になるだろうと『国民之友』は述べている。⁸⁸ また『国民新聞』も明治27年になると、マハンの海上

87 「膨脹乎、非膨脹乎（合衆国の国是）」『国民之友』212号、明治26年12月23日当今之問題欄、38頁。マハンの論文、“The Isthmus and Sea Power,” *Atlantic Monthly*, September 1893から引用している（マハン原文は筆者未見）。日本人の太平洋膨脹を危惧し、東洋と西洋の文明の衝突を宿命的に見るマハンについて、蘇峰配下のメディアが注目し始めたことは興味深い。後年、膨脹論者の蘇峰は同じく膨脹論者のマハンに反発を覚えるようになるからである。蘇峰と『国民之友』『国民新聞』がマハンに着目した点については、柴崎「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について」を参照のこと。また、麻田貞雄「歴史に及ぼしたマハンの影響——海外膨脹論を中心に」麻田訳『アメリカ古典文庫8 アルフレッド・T・マハン』（研究社出版、1989年第5版）所収、麻田『両大戦間の日米関係 海軍と政策決定過程』（東京大学出版会、1993年）20頁が、マハンに反論する蘇峰について言及している。

88 「合衆国の外交」『国民之友』273号、明治28年12月7日社説、1-5頁。マハンの論文、“The Future in Relation to American Sea Power,” *Harper's New Monthly Magazine*, October 1895から引用している（マハン原文は筆者未見）。

89 柴崎「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について」15頁。奇骨生「海上の権力（肝付海軍大佐の意見）」『国民新聞』明治27年10月24日より11月1日まで8回連載。明治24年に刊行されたマハンの『海上権力の歴史に及ぼした影響』（*The Influence of Sea Power upon History, 1660-1783*）を紹介している。

権力史論に関する記事を連載するようになる。⁸⁹ 加えて、『国民之友』はマハンの思想に呼応するかのよう、「資本家よ。何ぞ太平洋上に覇権を振はざる。航海権を握るは凡に於ての覇権を握る也」と呼びかけ、アメリカをライバル視しつつ、民間航海業の太平洋支配を主張した。⁹⁰

したがって以上の誌（紙）面を編集する蘇峰自身も、明治26年から28年にかけて、もし日本のハワイ、南洋諸島進出が実際に行われれば、アメリカの太平洋進出と衝突するであろうことを感じ取っても不思議ではない。実際、明治23年の時点で蘇峰は早くも次のように記している。「将来太平洋中の主権を握る者は、その東岸に在る米国に非ざれば、その西岸に在る日本ならん」。太平洋岸の国で、太平洋の群島を他人に占有されて安然としている者は、自分の寝床に他人が眠るのを許すようなものだ。「之をしも忍ふ可くんば、孰れをか忍ふ可からざらん」。⁹¹ この言葉からうかがえるように、蘇峰は太平洋における日米の覇権競争を微妙に予感し始めていたと考えられる。しかも太平洋の群島を他人が占有するのは我慢できないという上記の一節は、日本の膨脹にかけた蘇峰の並々ならぬ意志を感じさせる。しかしながらその一方で、蘇峰は翌24年に「日米同盟論」を発表し、その中でアメリカと日本が商業上の「善交」「同盟」によって手を取りながら太平洋上を雲竜のように駆けることを望んだ。「将来に於て太平洋上女王と為るもの、我と彼とにほかならざるを確信する……。吾人は米国を以て政略上の友と望まず、吾人は社交上、若くは商売上の益友となし、與に轡を駢らべ、以て文明の前途に馳駆せんことを冀ふのみ」。⁹² つまり蘇峰はアメリカとの将来の対決を薄々感じながらも、これを俎上に載せることはせず、逆に日米親善論を全面に押し出そうとしている。彼は無意識のうちに日米危機の萌芽に不安を感じ、それを見まいとしたのではないか。

さらに蘇峰は、アメリカが予定するニカラグア運河開鑿について次のような期待を寄せた。この運河が落成すれば、横浜・欧州間に直線航路を開くことができる。我邦の富が許せば、イギリス人がスエズ運河の権を握るように、他日、我邦人がこの運河の権を握ることを望まざるを得ない。この運河の開鑿は我邦と米国の関係を密にする一つに相違ないと蘇峰はいう。⁹³ ここで明らかなように蘇峰は、日本がニカラグア運河の権益を手に入れる可能性があると考えている。しかし日

90 「太平洋の覇権」『国民之友』258号、明治28年8月3日時事欄、38-39頁。

91 前掲「日本人種の新故郷」（明治23年6月13日）、8頁。

92 前掲「日米同盟」（明治24年4月23日）、17頁。

93 同上、16頁。結局その後、ニカラグア運河の工事見合わせが伝えられた。「ニカラグア運河」『国民之友』279号、明治29年1月18日、52頁。

本が中南米まで膨脹するならば、アメリカはそれを許さないであろう。また運河が開通すれば、アメリカは逆に太平洋への進出を積極的に進めてくるであろう。ところが蘇峰はそうした点に目をつむり、運河建設によって逆に日米関係が緊密になるだろうと述べている。ここには、アメリカがこれまで通り日本にパターンリズムを発揮し、日本の国益追求を大幅に許容してくれるだろうという楽観が表れている。

以上のように、明治20年代の蘇峰は移民問題をおある程度認識しつつも、それを深く憂えた形跡が乏しく、また将来の太平洋での膨脹衝突を予感しながらも、それを見まいとし、あるいはアメリカの対日態度を楽観的に見た。ここで次の疑問が生じる。どうして彼はアメリカとの対立の可能性を直視しようとせず、日米親善論に傾いたのか。その理由を考えるには、蘇峰がアメリカに強い思いを有した点を見ておく必要がある。当時の蘇峰は、既に述べた通りアメリカに怒りを潜在させる半面、以下のような好意的イメージをも有した。

第一に、同志社、大江義塾時代と同様に、蘇峰にとってアメリカはピューリタンのキリスト教の影響が色濃い清冽で精神的な国であり、自由と平民主義（民主主義）によって活気に満ち溢れた国であった。蘇峰によると「米国の新鮮なる自由の空気」が米国人民の「不羈独立の精神」や「米国的の企業心」を生み出し、その中から見識と徳性を兼ね備えたジョージ・ワシントン、独立檄文（独立宣言）の起草者で英邁かつ清廉潔白なトマス・ジェファソン、公義心と雅量のあるエイブラハム・リンカンのような大統領が登場し、進歩した憲法、多くの私立大学、あるいは世界無類の富が現れた。または南北戦争でアメリカ人が見せた志士的な態度、「愛国心」や、新島襄のラトランド演説の際、アメリカ人が示した「義侠心」の源となった。このように考える蘇峰にとって、アメリカは将来の日本が指標とすべき模範であり、ロングフェローやエマソンが示す自由自主の精神は敬愛すべき心の支えであった。⁹⁴ そうした国との対立を蘇峰は心に描きたくなかった

94 「森有礼君」『国民之友』42号、明治22年2月22日社説、8頁、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。「隠密なる政治上の変遷」『国民之友』19号、21年4月6日社説、10頁、のち草野茂松、並木仙太郎編『蘇峰文選』（民友社、大正5年2月第7版）に収録。「人民の手に依りて成立する大学」『国民之友』19号、21年4月6日社説、12-13頁、文中に、吾人はかつて『国民之友』17号で新島襄の教育主義を説明したとあり、17号（21年3月2日）を調べると「福沢諭吉君と新島襄君」がそれに該当する。和田「年譜」によるとこれは蘇峰筆であるから、「人民の手に依りて成立する大学」も蘇峰執筆であることがわかる。「人物」『国民之友』224号、27年4月23日社説、4頁、のち『蘇峰文選』収録、『新日本之青年』142頁、蘇峰生「諸葛孔明」『国民新聞』28年9月22日社説、「将に発布せられんとする憲法に就て」『国民之友』40号、22年2月2日社説、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。こうした蘇峰の好意的なアメリカのイメージは枚挙にいとまがない。

のであろう。

第二に、外交上、日本に便宜をはかってくれるアメリカのイメージである。蘇峰によると、ペリーが浦賀に乗り込んだ際の挙動は感謝できない。しかし不完全ながらも我邦の国益を幾分図った通商条約を与え、治外法権の廃止を望んでいたのは初代駐日総領事タウンゼンド・ハリスであり、我邦の税関規則改正を擁護したのはジョン・A・ビンガム公使であり、明治11年に吉田・エヴァーツ条約を調印して我邦に関税自主権を認めたのは米国であり、さらに16年、四国連合艦隊下関砲撃事件の償金を我邦に返還したのも米国であった。「吾人は実に米国を以て、我邦の、……国民の良友たりと断言するの、過当ならざるを見るなり」。このように蘇峰は「友好」アメリカのパターナリズムに厚い感謝の念を捧げている。⁹⁵ そのような国との対立は、やはり蘇峰にとって思い描きたくないことだっただろう。

以上のように蘇峰にとってアメリカは憧憬の対象であり、しかも日本に温かい好意を示してくれる存在であった。こうしたアメリカへの特別視があったからこそ、蘇峰は日米衝突を予感しつつも、そこから目をそらして日米友好を楽観することができた。しかし、後にアメリカはそうした日本側の甘い幻想を打ち破る厳しい態度に出る。しかし、そうであるからといって蘇峰を単純なアメリカ傾倒者、崇拜者と批判し去ることはできない。彼はアメリカのネガティブな部分をよく把握しており、ペリーの砲艦外交やアメリカ人の人種偏見を憎んだことは既に述べた通りである。

その他にも、明治20年代のアメリカはいわゆる「めっき時代」「金びか時代」を迎え、経済の急成長に伴う拜金的な世相、政財界の癒着と政治腐敗、社会道徳の低下が大きな問題となっていた。『国民之友』はそうしたアメリカの事情を以下のように報じている。アレクシス・ド・トクヴィルがアメリカを自由の仙境なりと賞賛したのは、すでに半世紀の昔となった。今日のアメリカでは選挙における投票売買と賄賂が横行し、またヨーロッパから移民したごろつきの野蛮風が東部に流れ込み、武器を持たなければ日没後、道を歩くこともできない状況であるという。⁹⁶ 蘇峰自身、アメリカの政治腐敗を取り上げて次のように述べている。

95 前掲「日米同盟」（明治24年4月23日）、10頁。蘇峰は続けて、己が欲する所を以って人に施すの金誠を交際の要訣とすれば、どうやって米人に報いるべきかと述べている。このように国際関係に道義を持ち出したため、蘇峰はアメリカにも同様の徳義を期待し、後年、それが受け入れられなくなると、裏切られたように感じて憤ることになる。

96 「亜米利加の汚点」『国民之友』176号、明治25年12月23日当今之問題欄、43頁。蘇峰もニューヨークの「悪人町」について聞いていた。『新日本之青年』155頁。

虐政、腐政は専制政治よりも人物を欠いた立憲政治の下で行われやすい。なぜなら自由制度の下では平凡者流の下らぬ人々が法を利用して悪をほしいままにするからであり、米国の州政治の腐敗はその証左となっている。古代ギリシアにペリクレスが、かつての米国にリンカンが必要であったように、平民政治〔民主政治〕にこそ人物が必要なのだと蘇峰はいう。また〔イリー鉄道の支配をめぐる争った〕世界の富者ジェイ・グールド、コーネリアス・ヴァンダービルトの輩は北米を縦横に走る鉄道、宮殿のような家を持ち、一夜の宴会費は数万円に上ることもある。しかしその快樂に伴う心の不安はどれくらいのものかとして、アメリカの資産家を批判した。⁹⁷ このように蘇峰はアメリカの民主主義に衆愚政治の一面が見られ、拝金主義の風潮が盛んな点を押さえており、アメリカが決して理想の国ではないことを理解していた。それと同時に『国民之友』は、「拝金国」アメリカに黄金を超えた勢力、すなわちエマソンの「微言天機に触るゝの靈眼」やリンカンの「博愛天意を諒するの慈腸」があることを指摘し、アメリカ人を拝金主義という観点からのみ見るのは間違いであることを訴えているが、エマソンやリンカンを敬愛する蘇峰も同様の考えを有したと考えられる。⁹⁸

このように蘇峰と『国民之友』、あるいは『国民新聞』はアメリカを表面的に捉えるようなことはせず、様々な観点から重層的に観察しており、それは今日の日から見ても優れた見方であった。蘇峰は海外の書物や新聞雑誌を不断に読むことによってアメリカの情報を積極的に収集しており、同国がポジティブな面とネ

97 「人物」『国民之友』282号、明治29年2月8日社説、2-3頁、文体から蘇峰と判断した。「質素の生活、高尚の理想」『国民之友』255号、28年7月3日社説、蘇峰筆であることは和田「年譜」による。また「米国の貧民救済法」『国民之友』260号、28年8月23日雑録欄、29頁は、アメリカに富豪がいる反面、「貧民無職業者」が多いことも伝えている。以上、あげたようなアメリカのマイナス点の指摘は、明治20年代の前半、後半を問わず、一貫して諸所に散見できる。

98 「非黄金万能力」『国民之友』258号、明治28年8月3日評論欄、32頁。後の蘇峰は同様の意見をしばしば表明している。なお『国民之友』がリンカンにとくに着目し始めたのは、「政界以外の人物」161号、明治25年7月23日からであるが、それは蘇峰が Carl Schurz, *Abraham Lincoln: An Essay* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Co., 1892) を手にした時期とほぼ一致する。お茶の水図書館成篁堂文庫の蘇峰旧蔵書には、表紙見返しに「I. T. Tokudomi 1892」のサインがあり、1916、1918年の『アウトルック』(*The Outlook*) 誌から切り抜いたリンカンの記事が挿入されている。蘇峰が後々までリンカンへの興味を持続したことがわかる。本文の書き込みは、蘇峰とは別人の「すかも生」なる人物によるもので、注意が必要である。

99 この時期の蘇峰がとくに熟読したアメリカに関する書物としては、例えば Goldwin Smith, *The United States: An Outline of Political History 1492-1871* (New York: Macmillan and Co., 1893) がある。お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書には、ほとんど全頁にわたって赤、青のアンダーライン、サイドラインが引かれ、読み込まれた後が歴然としている。第4章の「デモクラシーと奴隷制度」にも多くのラインが引かれている点は興味深い。最終頁に「二十七年三月十七日」と読了日が記されている。

ガティヴな面の絡み合った複雑で多面的な国であることをよく知っていた。⁹⁹ その蘇峰ですら、楽観を排して同国を冷静に眺めるのは難しかったのである。西洋列強のアジア進出から重圧を感じ、呻吟していた蘇峰または当時の日本人にとって、日本の方向を指し示すモデルとなり、しかも日本に父性的な好意を示すアメリカの態度はまことに心強いものであった。そうした国に対して、蘇峰はともすると熱い思いを傾け、期待を寄せ、将来の日米対立の悪夢を心の外に退けようとしたのである。

おわりに

明治20年代の蘇峰はロシアの東進南下政策に重圧を感じ、条約改正問題をめぐるイギリスの態度に屈辱を感じ、さらにアメリカについてはペリーの砲艦外交と日本人への人種偏見に怒りを感じていた。そうした中で蘇峰は欧米から物理的、精神的に抑圧される日本という思いを募らせ、西洋の膨脹と圧迫感を撥ね返すために大日本の膨脹を唱えるようになる。しかしながら蘇峰は潜在意識においてロシアやイギリスの国力に圧倒されがちであり、日本に対する自信は決して不動のものではなかった。そこでエマソンの「自己信頼」を応用して、日本が膨脹するには国民の「自信力」が必要であることを説いた。大日本膨脹論にはトマス・R・マルサス、ディルク、シーラー、ピアソンなどイギリス人の発想が織り込まれていることが先行研究によって指摘されているが、¹⁰⁰ 蘇峰はその他にアメリカ人であるエマソンの精神も取り入れたのである。欧米に対抗するための大日本膨脹論は、欧米人の思想から示唆を受けて作られたものであった。しかし日本の膨脹は、西海岸やハワイへの移民拡大をめぐってアメリカとの衝突を引き起こさずにはいられない。実際、蘇峰も太平洋における日米の覇権競争を予感していた。ところが蘇峰はその不安感を日米友好論によって覆い隠し、日米関係を楽観的に見ようとした。蘇峰のアメリカ観察は多面的で優れた部分が多かったが、アメリカを自由と民主主義のモデル、日本に強い好意を示す友邦として特別視したため、日米対決の萌芽から目をそらしてしまう面があった。しかし将来、日米の膨脹が正面からぶつかり合い、アメリカが日本の帝国主義に反発を示したときはどうなるか。『国民之友』はアメリカを名指ししていないが、将来を予見するような以下のコメントを残している。¹⁰¹

100 前掲、ジョン・D・ピアソン氏、宮本盛太郎氏の論文、著書のほか、ビン・シン『評伝 徳富蘇峰』の第二章「蘇峰の膨脹主義理論」。

101 「友邦と敵国」『国民之友』247号、明治28年3月13日時事欄、57頁。

大日本が世界に膨脹するの自由を毫毛たりとも束縛せんとする者は復讐心深き日本人の犠牲たることを覚悟せざる可らず。此の自由に従ふものは、我友邦也、之に反対するものは我仇敵也。

この言葉に従うならば、アメリカが大日本の膨脹を少しでも制限すれば「仇敵」となる。実際に日露戦争後の蘇峰は、まさに「日本の膨脹を妨害するアメリカ」を敵視するようになっていくのである。

なお、欧米から圧迫される日本という思いを強めた蘇峰は大日本の膨脹とともに、「白人の世界専横主義打破」、「アジア後進諸地域の指導と文明化」を訴えた。こうした心理過程は後年の蘇峰が示したものと酷似している。¹⁰² すなわち、①日露戦争後から大正期にかけてアメリカの日本移民排斥によって精神的に追い詰められた結果、白閥打破論、アジア・モンロー主義を唱えるようになったこと、②満洲事変から国際連盟脱退通告に至るまで、アメリカと国際連盟が日本に圧力と干渉を加えたという意識を強めた結果、自主的外交、世界水平運動（白人による有色人種差別の撤廃運動）、大アジア主義を唱えるようになったこと、③日中戦争下、アメリカが日本に経済、外交、軍事的圧力を加えたという被虐感を高めた結果、アメリカの打倒と大東亜の解放を唱えるようになったことである。いずれも日本を抑圧するアメリカに対して、日本が精神的または物理的な逆膨脹によって雪辱するという構図になっていることがわかる。蘇峰の心理に即してまとめてみると、(1)欧米からの圧迫感（不安）→(2)大日本の意識と使命感（自己拡大）→(3)カタルシス（小満足）→(4)不安の残存となる。このパターンを一つのサイクルとして、それを循環的に繰り返す。それが明治、大正、昭和戦前・戦中を通じて蘇峰の言論に一貫する特徴である。このパターンがはじめて生じたのが明治20年代であった。したがって蘇峰の内面においては、この時期から日米戦争に向けての方向付けの口火が切られたとよい。蘇峰のアメリカとの心理的格闘はさらに続くことになるのである。

102 拙著『近代日本人のアメリカ観』を参照のこと。

